

を食べるのなら『けやき』だったらいい。らしい、というのは、私は小学六年生の十二歳。そんなわけで、自分の家とはいえ『けやき』がどんな人生（お店だから人生じゃないかと店生かな？）を歩んできたか、本当は知らないのだ。

そして、『けやき』では、私と、私のお母さんと、その親であるおじいちゃんとおばあちゃん、四人で暮らしている。お父さんはいない。だけど、私がこの世に存在しているということは、私にもお父さんはいらぬということ、なぜ家にはいないのかというと、私が赤ちゃんの頃にお父さんとお母さんは離婚したからだ。

赤ちゃんの頃の記憶がある人間なんてめったにいないだろう。私も、幼稚園より前の自分のことを思い出そうとすると、それはとてもむずかしい。つまり、何が言いたいかというと、私にとってお父さんという人物は、最初からいなくなつたので、今も家になくてもそれは一日が二十四時間と決まっているのと同じくらい当たり前のことなのだ。

七月二十日。今日から待ちに待った夏休みだ。クラスの中には有名なテーマパークに行くとか、海外でバカンスをするというすごい子もいる。

私は……というと、これといった特別な予定は何もない。夏休みの予定表は真っ白で、いっすすがすがしいくらいである。

私が住んでいるのは純喫茶『けやき』。お店は年中無休でおじいちゃんとおばあちゃんは毎日働いている。お母さんは週に五回、自転車で二十分の距離にあるコンビニでアルバイトしていて、休みの日は「つかれたー」と言っただけでごろごろしているから、私は夏休みだろうと旅行や、特別なお出かけには期待できない。

前に、お母さんに「なんでそんな遠くのコンビニにバイトに行くの？ 働くなら『けやき』でいいじゃん」と言つたことがある。おじいちゃんは七十六歳、おばあちゃんは七十一歳になった。お店が混むお昼どきには、二人では大変そうなきももある。

「いやいや、ソレありえないから」

お母さんは顔の前で手をひらひら振りながら言つた。

「一日中あのひとたちと顔をあわせてるなんてたまつたもんじゃないうわよ。ただでさえ家がせまくてきゆうくつなのに」

「あのひとたちって、自分の親じゃん」

私が言つたら、お母さんは「ハッ」と息をはいした。

「ユナだつて学校行つてる間は、親と離れて過ごしてるじゃない。ね、人間、親子とはいえ、ある一定の距離感というの必要なの。だから、あたしはコンビニで働いてるってわけ。おわかり？」

よくわからなかつた。